
描写研究会作品集

下り坂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

描写研究会作品集

【コード】

N3020T

【作者名】

下り坂

【あらすじ】

仲直りするときには気恥ずかしさが伴うもの

第一回描写研究会（前書き）

【テーマ】

友情

【世界観】

現代

【時間】

夏の夜

【場所】

田舎の道路

【人物設定】

女（主人公）：ツンデレ

男（主要登場人物）：冷静

それぞれ二十代の学生

第一回描写研究会

コオロギと蛙の鳴き声が辺りを包む。

最後の大学生活の夏、皆で花火を楽しんでいた。気がつくとは些細な言い争いが始まり皆を巻き込んでいた。冗談ですますには罰が悪くなり、騒ぎの中心である彼女は一人走り出してしまふ。だがムキになっていく彼女は「いつものこと」であつて皆はさほど気にしていない。

彼はジャリツと砂利を踏み鳴らしながら彼女を探した。やがてしやがんでいる彼女を見つけ、近づく。しやがんだ彼女は葦の長い雑草の中に隠れているように見える。

彼女は身動き一つない。

「やつと見つけた。皆心配しているぞ」

沈黙を返答した彼女に対し、彼は困つて腕を組んで天を仰いだ。

「蛍」

「えっ？」

「蛍を見てたんだよ、悪いか」

彼は彼女の隣にしゃがんで目を凝らした。よく見ると側溝があつて、チラチラと映る淡い光が見える。

「綺麗だな」

彼女はいつもらしからぬ真面目な顔でじつと蛍を見ている。ふと彼は妙案を思いついた。

「皆に見せてやりたいな」

彼はそれ以降何も言わない。

それからどれだけ時間が経つただろう。

「あたし、皆を呼んでくる」

彼女は立ち上がつて皆のところへ走つていった。振り向きざまに見えたいつもの強気そうな彼女の表情を見て、彼は微笑みながらため息をついた。

「ありがとう」
彼を背にしたまま彼女は呟いた。

第一回描写研究会（後書き）

「綺麗だな」のところ、誰のセリフかわからないようにしているのはわざとです。

第二回描写研究会（前書き）

太宰治「富岳百景」より、一文を引用して、それを推敲・改稿する。

【原文】

「お客さん！ 起きて見よ！」かん高い声である朝、茶店の外で、娘さんが絶叫したので、私は、しぶしぶ起きて、廊下へ出て見た。

娘さんは、興奮して頬をまっかにしていた。だまって空を指さした。見ると、雪。はっと思つた。富士に雪が降つたのだ。山頂が、まっしろに、光りがやいていた。御坂の富士も、ばかにできないぞと思つた。

「いいね。」

とほめてやると、娘さんは得意そうに、

「すばらしいでしょう？」といい言葉使つて、「御坂の富士は、これでも、だめ？」としゃがんで言った。私が、かねがね、こんな富士は俗でだめだ、と教えていたので、娘さんは、内心しよげていたのかも知れない。

「やはり、富士は、雪が降らなければ、だめなものだ。」もっともらしい顔をして、私は、そう教えなおした。

第二回描写研究会

「お客さん、お客さん！」

何事か、と思わせるような甲高い声が耳に入る。呆けた意識のままで寝返りをうつ。

「起きて見なよ！」

喧しくてたまらないのでソソソと起きて廊下に出る。

娘さんは紅潮しながら、ぴよんぴよんと飛び跳ねるように富士を指さしてはしゃぐ。私の姿を見て一層腕を振り回す。

見ると富士は雪化粧をしていた。

単調な深い緑色の景色の中に雪の白さは映えている。山頂付近に白くなったことで山の形が鋭く、鋭角さを増したようにも見える。

「ほっ」

感嘆をあげ、寝ぼけた頭を叩き起こす。

「これが美しいとされる御坂の富士か」

そう言葉を漏らす。

「美しいでしょ」

娘さんはいくらか過剰にはしゃいでいるように見えた。私は娘さんに対し、かねがねから私の富士に対する酷評を聞かせていた。酷評を聞いて、このはしゃぎようである。どうやら娘さんは私の酷評を聞いて面白くない気持ちになっていたようだ。

「これを見てもまだ『たいしたことない』って言うの?」

娘さんは満足気にしゃがみながら言った。

「ありきたりの山の風景も雪がかかると変わるものだ。これを見てきた先人の評価が我々に伝わったのだな。なるほど、山の景色はこうでなくちゃいけない」

妙に納得したふりをし、そう評価を改めて、娘さんに言い返した。

第二回描写研究会（後書き）

あえての未編集

第三回描写研究会（前書き）

絵を題材に補完・描写する

【題材】

「落穂拾い」 ジャン＝フランソワ・ミレー作

第三回描写研究会

終始、霞んで見えたその風景は何を訴えているだろう。

広大な大地に点在する人々は一様に小さい。そこには麦畑が一面に広がっていただろう。それを多くの労力を使って麦を刈り取った。そして、刈り取った麦は人と比べてはるかに巨大な塊に積み上げられ、威圧するかのよう存在した。

多くの麦を刈るために作業は手際よく行われた。そしてこの広大な大地である。多少の損失にかまっている暇はない。それは贅沢だろうか、はたまた、冒涇だろうか。労働者にはその認識はない。生きるために食糧を収穫するだけである。労働者を統括する有識者はいなかったらその知識と余裕でさまざまな文化を創造するかも知れない。しかし、労働者にその学と余裕はない。広大な大地を相手にするゆえ学と余裕は与えられない。

刈り取りの作業の際、収集されなかった穂はあたりに散らばっている。それを拾う彼女らの姿は哀愁が漂う。刈り取った後の大地は殺風景で物足りない、散らばった穂は見放された迷い子のような。何を暗示させるのか、と考えさせられる。

彼女らの顔は見えない。表情がわからない。しかし、重々しい色彩が何かを物語っているようだ。彼女らの持つ穂はわずかで、いくら積み重ねたところで巨大にはならないだろう。

幻想だろうか、夢幻の世界だろうか、霞んで見えるが重々しい風景に独特の世界感が広がっているのではなからうか…

第三回描写研究会（後書き）

視点が分かりにくいというアドバイスをいただきましたが、このままにします。

第四回描写研究会（前書き）

短歌を題材に補完・描写する

【題材】

秋きぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる

第四回描写研究会

早朝に親父が草刈り機を鳴らしていたので目が覚めた。それから朝食をとって、散歩して、昔読んだことのある本を読んで、ととりわけすることもなく時間を過ごした。昼下がりになると祖父ちゃんに御座を借りて家の裏手の、小さな畑の先にある杉の木に向かう。辺りの雑草は綺麗に刈られていた。枝を若干剪定した三本の背の高い杉の木。そこから先の目の前には黄金色の田んぼが広がっている。田んぼ側にある木の日陰に御座を敷いて寝っころがる。そこは少しばかり坂になっていた。

見上げた空は果てしなく広い。この景色はすぐそこにあってもなかなか見ようとほしなかった。爽快だった。ぼんやりと眺めていると気づけば六歳になる姪がしゃがみながら俺を見つめていた。

「遊びに来たのか？」

姪は首を縦に振って寄ってくる。

「でも残念だな、俺は何もする気はねえぞ」

「むーっ」と言いながら姪はちょこんと御座の端っこに座って草をいじり始める。

俺は目を瞑った。するといつもより早く起きたせいか眠気が襲ってきて、いつの間にか眠ってしまった。

…

不意に盛大に奏でる杉の木のざわめきに目が覚めた。肌を打つ突風。刈られた草は舞い、鳥たちは鳴く。傍らにいた姪が俺の腹のところに立ち膝で近づいて「すごいね」と呟いた。すごいという姪の感想が新鮮だった。

「こんなところで寝てると風邪ひくよ。あたしが布団になってあげるね」

そう言って姪が遠慮なしに俺の腹にうつぶせに乗っかってくる。

俺は姪を強引に腕だけで持ち上げて横に座らせた。

先ほどの一陣の風を境に風が出てきた。稲穂が波打つ。唐突に秋になった気がした。少しばかりの寂しさを感じた俺だったが以前姪は無邪気だ。いつか覚えていたら思い出話として今の話を姪にしてやろうと思った。

第四回描写研究会（後書き）

アットホーム！アットホーム！

些細な日常の中で心に残る淡い感動をあらわしてみました。

第五回描写研究会（前書き）

曲を題材に補完・描写する

【題材】

無伴奏チェロ組曲第一番ト長調よりプレリュード J・S・バッハ
奏者：P・トルトゥリエ

第五回描写研究会

『樹林の営み』

四季が織り成す衣替え。樹木は葉を落とし実を宿す。根が這う土は幾多の憑代を基に肥やしとなる。願わくは誰のために。

大地へ還る生きるものの末路。消えゆく意識を実に遣す。放たれたその身を謳歌し命を燃やす。願いを託すはどこに。

幾年の思いを宿す命。歴史をその身の糧に変える。染み渡る声を全身に受けその身を構築する奇跡を起こす。願わくは未来彼方に。

願いを届ける喜びを。願いが届かぬ悲しみを。願いは彼らを満たしてゆく。叶え叶えと満たしゆく。

輝く同志の励み合い。さらなる盛者たちは微笑みを浮かべる。風に揺らめき刹那の声を交し合う。願わくはざわめきまでを。

多くの仲間が寄り添う樹林。仲間は仲間を傷つける。悠久の思いの末にたどり着いた憎しみ合い。願わくは敵意にならんことを。

数々の営みは時の僕。幾多の命が広がり続ける。繁栄と引き換えに何を犠牲に何を奪う。願わくは同志の思いばかりを。

願いは未来を惑わせて。願わずは身を滅ぼして。願いに隠れる犠牲者を。願い叶わず消える者も。

第五回描写研究会（後書き）

詩にしてみました。

詩は不得手なのでアドバイスもらえるととても助かります。

第六回描写研究会（前書き）

【条件】

登場人物、場面等は指定なし。その代わり、二人の登場人物が異口同音に言葉を発言すること

第六回描写研究会

龍太はハンドルに肘を掛けるよう覆いかぶさっていた。隣の助手席には仲間の眞城が背もたれを倒してくつろいでいる。

「で、これからどうするよ」

眞城は他人事のように問いかけてきた。目の前に続くはずの道が土砂崩れによって消えている。

「どうしようもねえだろ」

大粒の雨がフロントガラスを激しく叩く。まだ夕方だが辺りは暗い。

「他に道はありそうか？」

普段車に乗らない眞城が問う。

「わからねえ、これから行くところは秘境の宿と言われているくらいのところだし、ないかもな」

その秘境の宿にはすでに二人の仲間が到着している。先程携帯電話で確認していた。

「明日はこの峠の向こう側に行くんだろ。しかしどうするよ」

「たまらず同じセリフを眞城は言う。」

「どうしようかねえ。ところでなんで待ち合わせ場所があんなところなんだ」

宿の指定は武司が行っている。武司はすでに宿に到着している仲間がこの旅行の発案者でもある。

「今日は引き返すか」

帰ろうにもここまで来るのに二時間はかかっていた。同じ道を長い時間運転して引き返すことを考えると億劫で気が滅入る。

「それは・・・なしだな。明日もあるし、時間かかるし。それによく武司が言っているだろ」

「あああれね」

『トラブルを楽しめよ』

武司の口癖を二人で言っただけだ。

普段は癪に障る言葉だが今は励みになる感じがしていた。龍太はため息つきながら真城に指示する。

「お前他の道探せよ。携帯で何とかなるだろ。最悪の場合、ほかに宿を探さなくちゃいけないかもな。それも考えておけ」

「へいへい、カーナビねえのがきついな」

「一度山降りて、迂回して、どれくらい時間がかかるかねえ」

「さてね、まあこりゃあ明日の話題にはなりそうだな」

「なるかねえ」

「ところで迂回路がない場合。あいつら山を下ってこれるのか？」

「わかんねえよ。でもあいつら楽しんでるんじゃないの？」

真城は携帯電話をいじり始め、龍太はハンドルを切って山を下って行く。

第六回描写研究会（後書き）

ニヒルな雰囲気を出してみたかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3020t/>

描写研究会作品集

2011年5月26日23時10分発行